

●「東洋神秘の国」を好奇・侮蔑・愛情さまざまな形で見つめた欧米人の記録を博搜。それらを通して当時の庶民生活を生き生きと再現。人類学の泰斗の貴重な遺稿。

欧米人の見た開国期日本

——異文化としての庶民生活

石川榮吉著

本書において著者は、日本の開国・国家建設期に訪れた欧米人が遺した旅行記や日記類を分析し、彼／彼女らの目に日本がいかに映ったかを検証している。当時の日本は、西洋にとって「極東の異質な国」であった。訪日した外交官、軍人、貿易商、探検家などはそれぞれの経験と視点から未知の国を描いている。西洋中心主義派から、中立的な文化比較派、さらには日本賛美派までと、日本の評価と位置づけは多様である。つまり、本書は、欧米人が発見した開国期の日本文化や庶民生活をとおし、異文化理解とはいかなるものかを問いかけている。

パレスティナ生まれの文芸批評家、故E・W・サイードは、『オリエンタリズム』（一九七八年）において、西洋の東洋に対する思考と支配の様式を強く批判している。それは、西洋がオリエントを自分に都合よく解釈し、ひとつの様式をもった存在として表現し、さらに支配する正当化の言説への批判である。本書で石川は、欧米人の描いた旅行記、日記、見聞記の内容が、西洋人が日本を理解するための一枚岩的な見方や考え方、つまり「ひとつの様式」を提示していないことを示唆している。彼／彼女らは、自分らが目にした日本の一つの習慣や事項に關しても異なる解釈をし、多様に表象しているからである。

異文化とは何か？ 異文化理解は可能か？ という問いは、永遠に続く人類の課題かもしれない。本書において石川は、欧米人の「日本人観」を知ることが、我われが「日本文化を再発見・再認識」することにつながるという。つまり、異文化や他者理解は、自文化理解と表裏一体の関係にあるのである。その意味で、本書が日本の社会と文化を相対化し、自文化の世界を柔軟にかつ深く理解するのに役立つことを期待する。

(須藤健一「刊行にあたって」より)

◎目次

はじめに——この本の意図

第一章 日本人の容姿

第二章 花の命は短かくて

第三章 破廉恥な日本人

第四章 男尊女卑うらおもて

第五章 庶民の衣服

第六章 庶民の飲食

第七章 簡素な庶民の住居

第八章 矛盾だらけの日本人

第九章 印象あれこれ

おわりに——異文化理解の心得

参考文献

刊行にあたって (須藤健一)

関係年表

人名・書名索引

体裁

・四六判・上製カバー

・二五六頁

税込み定価

・二六二五円

(本体二五〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一-四一九
電話〇三(三)八二八 九二四九
http://www.fukyo.co.jp

注文書	
流通センター取扱品	
発売	風響社 TEL: 03-3828-9249
税込み	一六二五円
部	

石川榮吉著

欧米人の見た開国期日本

異文化としての庶民生活

ISBN978-4-89489-121-0 C0039 ¥2500E

[お客様控え]

ご氏名
ご住所

お電話

月 日